

歌ヲヨミテ奉リ、後三條帝住吉詣シ給ヒシ時ニ遊女ヲ召近衛帝ノ島ノ千歳若ト云遊女ヲ召シ  
コトナド、大和物語、大鏡、榮花物語、平家物語等、何ホドモ見エ候コトニテ候、

〔貞丈雜記<sup>二</sup>品〕一白拍子と云ふは遊女也、是は鳥羽院の御時、島の千歳<sup>セシヤイ</sup>和歌の前と云ふ貳人の女

舞出だしけると也、始は水干に立ゑぼしを著て、白鞆卷<sup>銀作りのさや卷也、さや卷</sup>をの事、刀劔の部にしるす、

ければ、男舞とぞ申しける、然るを中比より、ゑぼしをばのけて、水干ばかり著て舞ひたるよし、平家物語に見えたり、水干は多くは白色を用ふる物なれば、かの島の千歳、和歌の前の著たる水干

も、白かりしによりて、白拍子と名付けたるなるべし、朗詠集にある詩歌などをうたひ舞ふ物也、今も猿樂の能に、白拍子の形をして舞ふ事有、古の白拍子の體を、昔よりまなび來りたる物なり、

〔平家物語〕妓王事

そもくわが朝に、まらびやうしのはじまりける事は、むかし鳥羽の院の御宇に、しまの千さい、和歌のまへ、かれら二人がまひいだしたりけるなり、はじめはすいかんにたてゑぼし、まろざやまきをさいてまひければ、おとこまひとぞ申ける、しかるを中ごろより、ゑぼし刀をのけられて、すいかんばかりもちひたり、さてこそまらびやうしとは名づけけれ、

〔徒然草<sup>下</sup>〕多久助が申けるは、通憲入道舞の手の中に、興ある事どもをえらびて、磯の禪師といひける女に、教てまはせけり、まろき水干にさうまきをさ、せ、烏帽子をひき入たりければ、男舞とぞいひける、禪師がむすめまづかといひける、此藝をつげり、是白拍子の根元なり、佛神の本縁をうたふ、其後源光行、おほくのことをつくれり、後鳥羽院の御作もあり、龜菊にをしへさせ給けるとぞ、

〔増鏡<sup>老</sup>の波〕御花はつれば、兩院<sup>草、龜山、後深</sup>、ひとつ御車にて、伏見殿へ御幸なる<sup>略</sup>、又の日は、ふしみのつにいでさせ給ひて、鶺鴒舟御らむじ、白拍子御船にめし入て、歌うたはせなどさせ給ふ、